

2018年度 立命館附属校・提携校 第1回中堅研修

附属校教育研究・研修センター

7月10日(火)朱雀キャンパスにおいて、第1回中堅研修をキャリアガイダンス編集長 山下真司先生を講師にお迎えし、「新学習指導要領から考える授業づくり・学校づくり」というテーマで実施した。

山下先生から冒頭に「研修で、新学習指導要領の理解を通じて、生徒にどんな資質・能力を育むか？これからの授業づくりにどう取り組むか？を中堅リーダーとして考える機会にしたい。」というねらいを説明いただいた。

講演では、受講者どうしの意見交流や受講者が自分の授業や学校の教育活動を振り返る場面も取り入れていただき、受講者自身がこれから生徒にどんな資質・能力を育むかを考える良い機会になった。

受講者は各校で授業終了後、京都はもとより滋賀県、大阪府南部、奈良県からも研修(18:00~20:00)に参加したが、充実した研修に参加して本当によかったという感想を多く寄せた。

参加者は、18名(立命館小1名、立命館宇治中高7名、立命館守山中高4名、初芝立命館中高1人、初芝富田林中高1人、育英西中高4人)であった。

<研修内容>

今の教育界の置かれている現状は「教育改革の嵐の中にある」と公立高校の校長が形容しているという話題から本日の講演はスタートした。

生徒が働く将来の社会では、AIなどが進化していく中、今ある仕事の多くはなくなると言われています。

AIと人間の力の違いは何なのか？脳科学者の茂木健一郎氏は著書で次のように述べています。

AIに有利な力：書類作成、記憶力、計算力、データ検索・解析、オペレーション業務全般

人間に有利な力：コミュニケーション、身体性、発想・アイデア、直感・センス、イノベーション

山下先生は「自分自身は記憶力、計算力ばかり学んでいた気がします。」と言われた。

AIやIoTがさらに進化していく中、生徒たちにどんな資質・能力を育まなければならないだろうかを個人視点と組織視点で考えて欲しいと思います。

社会は変わってきています。これまでの社会、これからの社会を考えると早く追いつけ追い越せの「競争」という文字が「共創」に変わっているのがポイントと思っています。どうやって社会課題を乗り越えていくのか、多様な人々と新しい価値を生み出したり課題を乗り越えたりすることが求められる時代になっていると思います。



社会が変わる	
これまでの社会 工業化社会 知識・技能の「習得」と「再生」 【情報処理力】 価値の継承と「競争」 1人のリーダーとフォロワー 同質化社会で積み上げるキャリア 同一文化の中で暗黙の理解	これからの社会 知識基盤社会 知識・技能の「活用」 【情報駆動力】 新しい価値の創造と「共創」 個々人がリーダーシップを発揮 自分のキャリアを切り拓く力 異文化の中で多様性の許容
変化が激しい、予測できない社会において必要となるのは？ 「学び続けられる人」の育成	

次に、新テストや新学習指導要領についての概要を整理していただいた。

高校は今年度から激動の7年に入ります。今年度（2018年）は共通テストの試行調査2回目があり、来年は高校生のための学びの基礎診断、以降、大学共通テストの実施、学習指導要領の全面实施、新学習指導要領で学んできた生徒が受験する2024年に共通テストに国語、数学だけでなく、地歴・公民、理科分野に記述式が拡大されます。



「新テスト」の問題作成の方向性を3つにまとめて情報提供いただいた。

- ・1つ目はセンター試験がベースになる。
- ・2つ目は思考力、判断力を問う問題が出題される。
- ・3つ目は「どのように学ぶのか」を場面設定した問題が増加する。

場面設定とは勉強している場面、日常生活や社会設定、資料やデータを読み込むといった場面で日々の学習をどのように活用するかということです。例えば、英語では「遊園地の混雑予想に関するウェブサイトから必要な情報を読み取る力を問う」というものです。先生方の日々の教育活動の中でも少し意識・工夫するとこのような問題に対応できるのではないのでしょうか。

また、各教科の作問のねらいとする「思考力・判断力・表現力」及びそれらと出題形式との関係のイメージ素案が出ています。横軸に「問う力」が縦軸に出題形式が記されている。どの教科にも素案の表中に2重線が記されている。2重線より上の領域は共通テストで下の領域は各大学で問うて欲しいとメッセージを送っています。11月の実施される第2回共通テストでは平均点が設定され、昨年実施時より知識を問う問題作成が行われ、バランスの良い問題になると予想されています。

The table details the relationship between 'Thinking, Judgment, and Expression' (横軸) and 'Questioning Ability' (縦軸) across various subjects. It is divided into sections for 'Common Test' (共通テスト) and 'University Examinations' (大学入試). The table shows the presence of 2x lines indicating the focus of the questions.

「新学習指導要領」は高校では2022年度から全面实施ですが、教科書のない教科など（総合的な探求の時間、特別活動）は来年度実施可能です。

中教審の答申文書の中で使用されている言葉の回数を示していただいた。

最も多く登場するのが「資質・能力」559回、次に「探求」163回であった。これから何が出て来るようになるかを中心にかかれていないのでしょうか。

更に新学習指導要領を読み取るために4つのキーワードを示していただいた。「主体的な学び」「見方・考え方」「探究」「ポートフォリオ」である。

1つ目のキーワード「主体的な学び」と自主的な学びの違いはなんのでしょうか。自主的な学びは、与えられた課題に前向きに取り組むことです。自分で目標を決めて見通しを持って粘り強く取り組んでいく。そして、次につなげていくのが「主体的な学び」でまさにキャリア教育の部分ではないのでしょうか。今、学びが何のために勉強するのだということが目先のゴール設定だけになっていないのでしょうか。

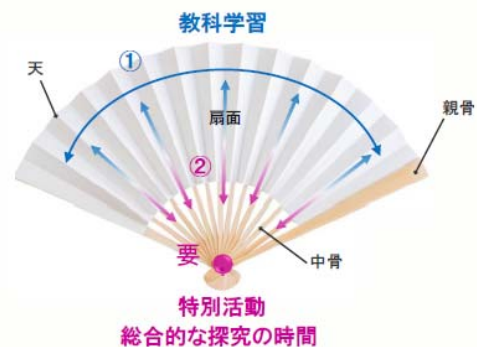
京大の特色入試で見ると「志」だといわれていますが、まさに評価方法にその特徴が表れています。「学びの設計書」がポイントです。高校までの学びがどうつながるのだということです。副学長は学びの足跡と意欲を見ると言われています。

2つ目のキーワード「見方・考え方」についてです。学習指導要領の答申の中で「教科等の学ぶ

意義の明確化」が章立てされています。その内容はキャリア教育の視点でみると「教科の学習の中だけでなく大人になって生活していくにあたって重要な働きをするものとなる。」(2016.12.21 中央教育審議会次期学習指導要領の答申資料 P33 キャリア教育の視点) という文章に行きつきます。先生は今の教えていることがどんな風に役立つかを意識されたいのではないのでしょうか。中学校では既に各教科の見方・考え方のイメージが示されているので参考にされるといいのではないのでしょうか。聖心女子大益川教授は「見方・考え方は教えるものでなく、働かせる場面をいかにつくるか。」と言っています。各教科の先生方が自分の教科が生徒に面白いなあと感じさせるような授業作りがポイントになるのではないのでしょうか。

3つ目のキーワード「探求」です。高校だけ「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」に変わりました。何が問題なのかを捉え、課題とどう違うのか、問題と課題を一緒にしないことがポイントではないのでしょうか。従来の探究のプロセスは課題を設定し Web や書籍で情報を収集し、整理・分析しまとめて発表して完結するといった横軸のまとまりでした。今回は縦軸に注目して自分で課題を見つけられるか、立てた問いが本当に正しいか検証し、場合によって課題を見直していかなければなりません。探究を高度化させ、自律的に探究を続け、大学で研究にまで発展ささせていくことが重要であるといわれている。

総合的な探究の時間と教科学習の関係は扇で例えると「要」が総合的な探究の時間で、扇を開いた部分が教科学習となり、それぞれの教科がつながっているのが横断的で、要の部分とどうつなげていくのかが大切ではないのでしょうか。



4つ目のキーワード「ポートフォリオ」です。総括的な評価だけでなく形成的評価を行っていく必要があります。「ポートフォリオ」を通じて取り組んでいくと言われています。学校ではさまざまな豊かな学びが展開されていますが、評価はペーパー試験が中心になっていないのでしょうか。豊かな学びがあるから豊かな評価があつていいのではないのでしょうか。その評価のひとつがポートフォリオではないのでしょうか。ポートフォリオによって教員による生徒の成長を意図した対話によるカウンセリングを行い、内発的動機を生み出していきます。ポートフォリオを積み重ねていき、あるタイミングで振り返り、何を学んできたか、何が出来るようになったかを積み直していくことが大切です。

今回、新学習指導要領全てに前文が記載されました。このメッセージの意図を汲むように各校の教育課程は組まれているかを点検してほしいと思います。

幼稚園の学習指導要領に記載されている「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を紹介いただいた。その内容はべき論ではなくめざしところで、幼稚園だけでなく高校まで筋が通っていることを理解してほしいと山下先生は言われた。

また、「人生に必要な知識はずべて幼稚園の砂場で学んだ」と言う本を紹介いただいた。「不思議だなと思う気持ちを大切にすること」という記述がありますが「これが探究の出発点ではないのでしょうか。」「探究とは？を！にすることだ。このプロセスが探究のプロセスだと思います。」と山下先生は言われた。

「何をどのように学んで何ができるようになるか」は学習指導要領の3つの柱(知識・技能、試行力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性)で表されています。今考えて欲しいのは、教科学習、総合的な学習、特別活動、道徳教育がつながっているか(縦軸)、また学力のうち知識・技能はもちろんですが、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性を育てているか(横軸)を考えて欲しいと思います。そして、この縦軸と横軸をどう編み上げていくかがカリキュラムマネジメントではないでしょうか。子ども達にどうなって欲しいのかが出発点で、どういう教育課程を組むのか、どんな授業するのか、最終的に卒業時にどんな力が身につくかというPDCAをまわすことが大事です。まさに学びの地図を描くことです。



今から各校の学びの地図を考えるきっかけとなるワークをして欲しいと思います。

「全国で注目の学校50」に選ばれるということを目指し、どう選ばれるかを考えるグループでワークを行ってください。個人で下記の内容を項目ごとにA4の紙に書き、最後にグループでプレゼン大会(3分/人)をしてください。聞き手は発表者に気付きや良かった点をフィードバックしてください。

①ご自身の学校について簡単に表現してください。3つくらいの言葉で表現。

②生徒達の 優れていること・頑張っていること。

③どんなところに課題があるのか、努力が必要と思うこと。

④生徒に育みたい資質・能力。

⑤授業や教育活動全体を通して取り組んでみたいこと。

⑥そのために、何を乗り越えないといけないか。

⑦最終的に出来たあかつきにはうちの学校はこんなにすばらしい。

ワークを終えて、山下先生から難しいのは④生徒に育みたい資質・能力、⑥何を乗り越えないといけないかは難しかったのではないだろうかとご指摘いただいた。

時間的に難しい場合は、下記のような1枚の紙で4象限でも可能であると紹介いただいた。

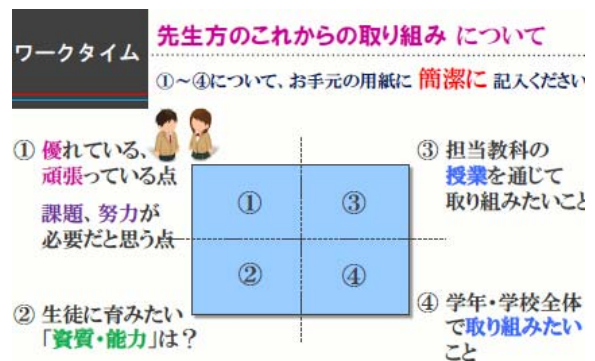
①生徒達の 優れていること・頑張っていることと努力が必要・課題だと思うこと。

②生徒に育みたい資質・能力は。

③担当教科の授業を通じて取り組みたいこと。

④学年・学校全体で取り組みたいこと。

ここで、③、④を考えて欲しいが、実は①と②で目線合わせをすることが目的です。①でも意見は異なります。子どもはいろいろな表情を持っています。その子どもたちをどう育てるかも対話のきっかけになるのではないのでしょうか。



しかし、現実には厳しく「すべては生徒のため」という言葉のもとに動くと思わしく思考停止になります。何のために、生徒のどういう風のためなのかを考えてください。時には、「やめる勇気」も必要ではないのでしょうか。新しいことをするときには一つ捨てる勇気もあっていいのでは。目先のことで

なくビジョンを持つことが必要で、ビジョンを共有することが大切です。

ある言葉を紹介いただいた。「外部の力で割れた卵は死を迎える。内部の力で割れた時、初めて命が誕生する。偉大なことは、常に内発的なものから始まる。」

教育改革のために学校改革するのでは上手く行かない。子どもたちをどうしていくのかを見据えていくことでビジョンを描き、それが学校を変えていく原動力になるのではないのでしょうか。

熊本大学の苫野一徳先生は「人は恐怖や不安では動かない。エロス（わくわくするもの）で動くんです。」立教大学の中原淳先生は「見えるかしないものはマネージできない。」とされています。現場で見える化していくのが大事では？

最後にリクルートの社内で行なっている **Ring** という企画をご紹介いただいた。つまり、今のままではリクルートはつぶれる。リクルートを壊して欲しいという意図でアイデアを広く募集するものである。この企画から、リクルートの新しいビジネスが生まれている。

1年に1回、全従業員で会社をどうしたいかを語り合っています。自分の考えをスケッチボードに書いて仲間探しをします。そして集い合って実現していく。これこそ、探究ではないのでしょうか。人から言われるのではなく、自分で課題を見つけ実現していく。これはリクルートでは人事評価につながっています。リクルートでは **w i l l**、**c a n**、**m u s u t** シートがあり、必ず問われるのは **w i l l** で、何をやりたいのかです。3年後どうしたいのかを問われます。本人だけでなく上司も部下をどうしたいかを考えます。それで対話をしてお互いの成長を促すことをしています。

リクルートの求める力のうちの「圧倒的な当事者意識」を紹介いただいた。この当事者意識は立命館の「**beyond border**」につながるのでは。皆さんは圧倒的な当事者意識で一步踏み出していたらと思います。

山下先生が素晴らしいと感じられた先生に共通していることは授業観があった。つまり、授業を通じて生徒に何を伝えるかが必ずあることだと言われた。生徒理解が元にあるので、クラスや学科、コースで違うが、生徒に何を伝えるかを考えて欲しいのです。「なぜ、数学が面白いのか」「物理がなぜ必要なのかの」を語ってください。

最後にこの研修を通じて、これからの時代に求められる資質・能力、それを養うための方法、そしてそのような学校・教育づくりを行うための仕組みを学ばせていただいた。一連の流れの中で、日頃の教育活動の振り返りや今後の教育づくりのヒントを多く得た。インプットだけでなく、多くの議論や意見交換を行える貴重な場となり、明日への活力を得ることができた。

(記録：立命館宇治 酒井淳平、附属校教育研究・研修センター 羽田澄)